



### たんぽぼ憲法

ここでは、人間として確かに生きるために、次の権利が保障される。

- 一 その人が説きを持って生きる。
- 二 その人の個性が生かせる。
- 三 その人のプライバシーが守られる。
- 四 その人が豊かな人間関係を持つことができる。
- 五 その人が知識の用い方、精神の導き方を学ぶことができる。
- 六 その人が挑戦し、あやまちをおかすことができる。
- 七 その人が未来について計画し、前進することができる。
- 八 その人があるがままに、感じたままに生きいくことができ、それが認められる。

は障がい者という概念はなかつたんですよ。山出…30年くらい前には障がいと言われていなかつたものが、今は障がいとされたり、どんどん細分化が進んでいるようにも思います。播磨…みんなそういうことを疑いもしない。それは貧困になつていく道筋を歩んでいると、いうことです。貧困には、経済格差だけではなく社会的排除という社会的貧困や文化的貧困もある。商業主義の文化が支配的で、文化格差が生まれている。もう一つ、精神的貧困もある。これは痛みや悲しみを慈しむ文化がなくなってしまっているということ。

こういう現代の貧困のほとんどに障がいのある人が当てはまつてしまふ。その現状と戦わないことだめだというのが僕の根底にある考え方です。

山出…障がい者は社会に適合できない、といふ見方もありますが、先ほど見学させていたいた制作の様子は、みんなすごく幸せそうで、豊かな場だと感じました。

播磨…ありがとうございます。個人差があり、いかと考えています。

山出…播磨さんのご活動は、障がい者だけに関わるものではなく、言葉を置き換えれば社会の全てに関係していくもののように感じます。

播磨…障がい者だけが恵まれたらいいといふものではない。目先の課題だけではなく、その先にある普遍的なものに眼差しを向けることで、活動の幅が広がっていくんです。

山出…以前は暴れたりすることでしか自分の気持ちを表現できなかつた人達が、絵やアートで表現し始める、そのきっかけには何があるんでしょうか？

播磨…いくつかパターンがありますが、自己表出によつて変わっていくことは多いですね。最初は殴り描きだったりして形にならないん

ます。僕は幸福とは「生き方の幅」だと考えています。ここにいる障がいのある人達は、自分で自分のやりたいことを選べる自由がある。そういう生き方の幅が、幸福なのではな

事が起き、心が不安になる時代には芸術運動が起きている。そんな時代だったからこそ、障がいのある人達のアートの価値を見直しました。アートの社会化、社会のアート化”を目指す新しい芸術運動を起こそうと考えたがりますが、それは近代の発想です。近代以前に

# たんぽぼの家

播磨靖夫 | はりま やすお

奈良県奈良市



### －活動を始めたきっかけ－

播磨…50年ほど前、僕が高松で新聞記者をしていましたときに、知的障がい者を対象にした絵画教室の取材に行きました。そこで彼らの作品を見て、岡本太郎の『今日の芸術』という本を学生時代に読んだときの衝撃が蘇りました。新聞記者独特的の直感で、これこそが「今日の芸術」だと思ったんです。

### －社会への広がり－

播磨…我々は行政の力をほとんど借りずに、民間の力でお金集めもブランディングもやっていました。トヨタ自動車や明治安田生命、近畿ろうきんなどの企業と組んで実施した事業は、メセナ協議会から文化庁長官賞などを受賞し、関わった企業のブランド力も上がっていました。

活動を続けていて感じるのは、生活と芸術がもっと近づかないことだめだということ。つ

### －現在の貧困との戦い－

播磨…こうした活動を全国に広めるために開催された「トヨタ・エイブルアート・フォーラム」に、最初に関心を持ったのはNPOでした。福祉関係者は「障がい者にアートなんてできるはずがない」と決め込んで、関心が薄かつた。みんな障がい者と健常者をわけて考えたがりますが、それは近代の発想です。近代以前に

### －社会とどう繋げていくか－

くる人、観る人、演じる人というふうにわかれいかん。そう思つて始めたのが「ひと・アート・まち」です。その一環である「プライベート美術館」では、まちのお店の人達が障がい者の作品から好きなものを選んで持ち帰り、自分のお店に飾るんです。お願いして飾つてもらひのではなくて、自分の感性で選んで持ち帰る。これは市民教育なんですよ。だから、誰かが評価したということではなく、自分の感性で選ぶということが大きい意味を持つんです。

また、これからアートを始めようとか、何かやってみたいと思っている人達が情報交換し、ノウハウをシェアする場として、奈良で「福祉をかる『アート化』セミナー」を開催していました。そこでともに学んだのが「工房まる」や「やまなみ工房」でした。



播磨…バブルが弾けたあと、「社会貢献を見直したい」と相談に来る企業の方が増えました。そこで、東京都美術館でのエイブル・アートの展覧会に声をかけたら、静々たる企業が参加してくれました。その頃エイブル・アートの本を出したこともあって企業の関心が高まり、大きく広まつていきました。

僕が「エイブル・アート・ムーブメント」<sup>(4)</sup>を提唱したのは1995年。阪神淡路大震災やオウムの都市テロがあった年でした。世界史的に見ても、価値観が揺らぐほど大きな出来

だけど、表現しているうちに自分でも驚くような才能が現れ始める。そうすると見てもらいたいという欲求が生まれ、コミュニケーションが始まります。ただ絵を描くのではなくて、想いを伝える方法を探るようになつていく。

していると、その人はずっと同じことを続けます。だから、こちらも毎回ちょっとずつ反応を変えるんです。そうすると、次はまた違うものを描いてくる。ただほめるのではなくて、イメージを持つてレスポンスをするといふことが重要です。そうすると、どんどん変わっていく。自己表出って面白いですよ。

れは障がい者だけじゃなくて、子どもだつて一緒だと思う。



ているという贈与の感覚を持つてゐるんじやないかな。自分の表現に誇りを持つてゐる。

**山出**：経済的な意味だけではない社会との繋がり方でしょうか。

播磨「そう。それを感じさせるためには我々の仕掛けの問題もある。彼らの表現に出会つた人が、芸術の至福を感じるということが多いです。たとえば作品を展示するときは、広い空間に1個だけ置く。たくさん並べてしまふと、表現を相殺してしまう。スペースを贅沢に使うことで、見る人の感動を増幅させることができるんです。

—アートの社会化と社会のアート化—

山出：僕は本来アートと生活は一体だと思っています。でも近代以降、アートの価値が価格によって計られるようになつた。それを否定はしないけれども、マーケット中心のあり方をどう超えるかが大きな鍵になつてくる。その点を播磨さんは、どのようにお考えですか？



#### <プライベート美術館>(6) の展示風景



がつて、いくのかが大事だと思います。若いアーティストは、みんな自分の作品を社会に繋げるために悩んで苦しんでいる。でも、ここに通う人たちはみんな幸せそうですね。この差って何なんでしょう？

A photograph of a white wall in a room where several colorful children's artworks are displayed. The artworks are framed and include various scenes such as a landscape with a horse, a beach scene, and abstract designs.

ブが求められる時代になりました。

んで活動していた人が、後に政治家になつた  
という話を聞きました。つまり、アートとい  
うのは政治の技術なんです。彼は作品を残す  
のではなく、政治家になり社会をデザインす  
ることにしたんですね。アートというのは  
行為やプロセスも含むと思っています。アーテ  
ィストがもつと政治やソーシャルデザイン  
に参加すべきだと思う。すでにコミュニティ  
デザインに取り組む若いアーティストも増え  
ていますよね。彼らの発想は実に面白い。多  
様なテーマを持ちながら、原点を見据えたデ  
ザインができるのはアートだけなんじやない  
かな。



#### <Good Job! 展>(10) の様子

## これまでの歩み (1973 → 2016)



播磨・僕は今、靈性（スピリチュアリティ）の研究をしています。宗教、芸術、哲學が一体になつていることを意識することがアートにとっては大事だと思っています。

山出・アボリジニの洞窟画のように、この世とあの世どとか、どこか違うところと自分自身を接続するためのイニシエーション（手続き・儀式）としてアートは生まれたと言われていますが、そのことと繋がりますね。

山出・うん。知的障がいのある人が、オーストラリアのブリスベンで1ヶ月間滞在<sup>⑥</sup>し、制作活動を行ったんですが、そのときにアボリジニが宇宙の物語を作品に込めていたことを知り、作品が変わってきました。ただ自分の好きなものを描いたらいいという方向性だったのが、自分の内にあるもの、大事なものを作り出すかという考え方を学んだようです。

### 受け止める側の課題と今後の展望

山出・今、アート界全体でも障がい者アートへの関心が高まっていますが、”障がい者“といふフィルターにかけられてしまふことは違和感を覚えます。

播磨・彼らの表現を”アールブリュット“や”障がい者アート“みたいな言葉で一括りにするのは惜しいと思います。障がいのある人達のアートにとって不幸なのは、それを受け止めるだけの知性や感性が社会に育つていないうことなんですよ。それって、今の社会が直面している問題そのものですよね。受け止める側の受信力があれば、どのようなものにも美を見出しができる。日本人は、不完全なものに美を見出したり面白がったりする感性を持つていますからね。

山出・それが豊かさに通じるんですね。

播磨・福祉業界の中では徹夜しても、ものづくりで所得を上げろという声がある。そこで我々は、アートを取り入れに繋げる方法を考えている。

アート活動は精神労働です。それにデザインの才覚を加えることによって、付加価値の高いプロジェクトが作られる。*(Good Job! プロジェクト<sup>⑩</sup>)*で提唱しているのは、そういう新しい可能性の再分配なんです。今年の夏には、そのシンボルとなる*(Good Job! センター<sup>⑪</sup>)*が完成します。そこで生まれるかけがえのないデザインやプロダクトに新たな可能性を感じてもらえば、福祉は変われる。これが我々の次のステップなんです。

年号	活動内容
1973	● 「奈良たんぽぽの会」発足
1974	● 「わたぼうしコンサート」初開催
1975	● 「全国わたぼうし音楽祭」初開催 <sup>①</sup>
1976	● 「財団法人たんぽぽの家」が設立認可
1977	● 「たんぽぽ憲法」を制定
1978	● 障がいのある人達が地域生活での自立を目指した「たんぽぽの家」完成 <sup>②</sup>
1979	● “ことばを得る”ことによって想像力がはばたき、その想像力が未来をつくる”をテーマに「わたぼうし文学賞」を創設
1980	● 障がいのある人達が地域生活での自立を目指した「たんぽぽの家」完成 <sup>③</sup>
1981	● 「ことばを得る」とによって想像力がはばたき、その想像力が未来をつくる”をテーマに「わたぼうし文学賞」を創設
1982	● 「社会福祉法人わたぼうしの会」が設立認可
1983	● 「社会福祉法人わたぼうしの会」が設立認可
1984	● ホールやコミュニティスペースを備えた劇的空間施設「わたぼうしの家」オープン <sup>④</sup>
1985	● 「たんぽぽの家」「わたぼうしの家」の2つの建物を拠点として、「社会就労センターたんぽぽの家」（身体障害者通所授産施設）スタート
1986	● 「たんぽぽ憲法」を制定
1987	● 「社会福祉法人わたぼうしの会」が設立認可
1988	● 「全国わたぼうし音楽祭」初開催 <sup>①</sup>
1989	● 「ひと・アート・まち」とその一環として「ブライベート美術館」スタート <sup>⑤</sup>
1990	● 「トヨタ・エイブルアート・フォーラム」の全国展開がスタート <sup>⑥</sup>
1991	● 「アジア太平洋わたぼうし音楽祭」スタート
1992	● 東京都美術館にて、エイブル・アート展「魂の対話」開催
1993	● 「芸術とヘルスケア協会」を設立（2005年「アートミーツケア学会」に改組）
1994	● 「ひと・アート・まち」とその一環として「ブライベート美術館」スタート <sup>⑦</sup>
1995	● 「エイブル・アート・ムーブメント」始動 <sup>⑧</sup>
1996	● ものづくりにこだわる全国の福祉施設や作業所の『すぐれもの』を集めてネットワーキングをはかる「まほろば・楽座」を開始（～2005） *『トヨタ・エイブルアート・フォーラム』の全国展開がスタート <sup>⑨</sup>
1997	● 「アートセンターハナ」（主催：近畿労働金庫） <sup>⑩</sup> スタート
1998	● 「福祉をかえる『アート化』セミナー」を開催 <sup>⑪</sup>
1999	● 23年前に建てられた「たんぽぽの家」が、地域に開かれた交流の拠点（アートセンターハナ）としてリニューアルオープン <sup>⑫</sup>
2000	● *障がいのある人の舞台表現の可能性を探る「エイブルアート・オンステージ」が始動（明治安田生命社会貢献プログラム）
2001	● アートセンターハナ所属のアーティストがオーストラリアでのアートディレクター・イン・レジデンスに参加 <sup>⑬</sup>
2002	● 「アートセンターハナ」所属のアーティストがオーストラリアでのアートディレクター・イン・レジデンスに参加 <sup>⑯</sup>
2003	● 障がいのある人のアートを社会に発信し、アーティストの仕事として還元する「エイブルアート・カンパニー」設立
2004	● 東日本大震災復興支援プログラム「笑ってプロジェクト」 「タイヨウプロジェクト」をスタート
2005	● 奈良県障害者芸術祭「HAPPY SPOT NARA」スタート（主催：奈良県）
2006	● 「Good Job! プロジェクト」スタート <sup>⑰</sup>
2007	● 障がいのある人のアートを社会に発信し、アーティストの仕事として還元する「エイブルアート・カンパニー」設立
2008	● 東日本大震災復興支援プログラム「笑ってプロジェクト」 「タイヨウプロジェクト」をスタート
2009	● 奈良県障害者芸術祭「HAPPY SPOT NARA」スタート（主催：奈良県）
2010	● 「Good Job! プロジェクト」スタート <sup>⑱</sup>
2011	● 「Good Job! プロジェクト」スタート <sup>⑲</sup>
2012	● 「Good Job! プロジェクト」スタート <sup>⑳</sup>
2013	● 「Good Job! プロジェクト」スタート <sup>㉑</sup>
2014	● 「Good Job! プロジェクト」スタート <sup>㉒</sup>
2015	● 「Good Job! プロジェクト」スタート <sup>㉓</sup>
2016	● 「Good Job! プロジェクト」スタート <sup>㉔</sup>

\*…NPO法人 エイブル・アート・ジャパン  
によるプロジェクト